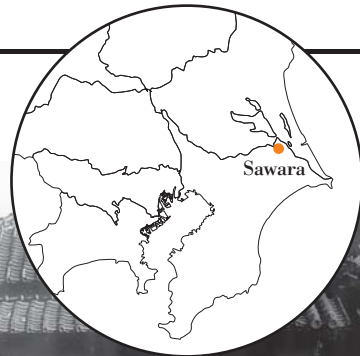


# From佐原



## 利根川水運で繁栄した町 歴史の町並みを次代へ

昔ながらの町並みで知られ、多くの観光客を集める佐原(千葉県香取市)。そのベースとなるこの町の繁栄は、利根川の水運によってもたらされた。富を生んだ利根川の水運とは、この水郷の町が歩んできた道とは——。繁栄の遺産を活かして明日を拓く佐原を訪ねた。

左上/小野川を小舟が行く風景は、今も佐原の風物詩だ\*

右上/大正～昭和初期の撮影か。山積み  
の俵から、商売の繁盛ぶりがうかがえる\*



大正後期、川岸の石積み工事後に小野川  
中橋から下流を見た眺め\*



左の家は、国の史跡に指定されている伊能  
忠敬旧宅。伊能家は佐原きっての名家

### 利根川東遷がもたらした 佐原の繁栄

小野川の両岸から柳が緑の枝を風にそよがせ、川辺のあちこちに「だし」と呼ばれる小さな船着き場が見受けられる。北総の水郷の町、佐原。その中心を流れて利根川へ注ぐ小野川沿いと、小野川と交差する香取街道沿いには、前面が格子造りの商家や黒漆喰の店蔵など、古い建物が軒を連ねて風情ある町並みを形づくる。1996年には重要伝統的建造物群保存地区に指定され、観光客が引きも切らない。

「お江戸見たけりゃ佐原へござれ佐原本町江戸優り」と歌われた繁栄。それは水運によってもたらされた。水郷はかつて今よりはるかに大きい内海で、銚子で鹿島灘とつながっていた。佐原はそのほりにあって16世紀末には市が開かれていたという。

佐原に欠かせないものであった水運は、江戸時代に入って17世紀半ば過ぎに一気に重要度を増し、佐原を大きく発展させることになる。徳川家康の時代に始まるともいわれる「利根川東遷」が成し遂げられたからだ。

それまで利根川は荒川と合流し、渡良瀬川水系の川とともに江戸(東京)湾へ注いでいた。現在の埼玉県東部の平野にはこれらの川が入り乱れ頻繁に氾濫を起こしていた。そのため、幕府は江戸を水害から守り、舟運の便を開き、新田を開発する目的から数回にわたって流路をつなぎなおして利根川の流れを少しずつ東へと移動させた。最終的に利根川本流は水郷に注いでいた常陸川の川筋を流れてその後太平洋へ、関宿で分かれる流れが江戸川として江戸湾へ注ぐ形となった。

### 利根川随一の河港商業都市 その栄光と落日

東遷が完了したのは1654年。銚子から新たに利根川となった川筋を通して関宿から江戸川へ入り、さらに小名木川などの運河を經由して、天候や潮流の影響が大きい海を経ることなく物資を江戸に運べるように

なった。一方、水郷には利根川が運ぶ土が堆積して新田開発が進み、穀倉地帯が形成されていく。佐原は周辺の物資の集散地として、東北からの荷や銚子周辺の産物の中継地として、数ある河岸のなかでも随一の河港商業都市へと発展していった。

一大消費地に成長した江戸の需要に応え、佐原には醸造業も発展。江戸へは米や穀物類、薪炭、酒、醤油、菜種油などが運ばれ、帰り船には江戸からの物資が積み込まれた。水運の主役は、帆を備えた高瀬舟。大きさは様々だが「15メートルの船で米俵が500俵積めたそうです」と、佐原の町並み保存に尽力してきた「NPO法人小野川と佐原の町並みを考える会」の理事長、佐藤健太良さんはいう。小野川河口に近い船だまりで小ぶりの舟に荷を積み替えて小野川を行き、だしに横付けてその荷を積み降ろしていたという。

江戸から様々な文化や学問がもたらされる中、佐原は全国を測量し『大日本沿海輿地全図』を作り上げた伊能忠敬や国学者・歌人として知られた楢取魚彦、朱子学者の久保木竹窓などを輩出し、豊かな町民文化を育んでいく。明治維新後も利根川の水運はますます盛んになって、蒸気船も活躍した。佐原は発展を続け、鉄道が敷かれた後も物資の集散地・商業の拠点の地位は変わらず、水運も徐々に先細りはしたが、1930年代まで活用されていた。

戦火を免れた建物とともに、佐原は戦後の混乱、続く高度成長期を通り抜けたものの、モータリゼーションが進み、物流や商業の形態が変わった1970年頃から急速に衰退していく。「にぎわいと活気が失われて、打つ手がないなか、文化庁の『重要伝統的建造物群保存地区』制度の制定に先立つ調査が1974年に佐原で行われました。そこで出てきたのが、繁栄の遺産である町並みを活かしたまちの振興です」と佐藤さんはいう。

水運と商業がもたらした富によって築かれた、佐原の見事な商家建築や美しい町並み。当時建材で覆ったり改築し

て外見が変わっているものも多かったが、町には1892年の大火後に建てられた商家を中心に、一部江戸時代の建物を含めて昭和初期までの建築が数多く残っていたのだ。

### 繁栄の遺産「町並み」で明日の佐原を拓く

とはいえ再開発を望む声も強く、小野川に蓋をして駐車場にしろという意見もあったほどで、町並みを活かした振興への気運は盛り上がりなかったという。しかし2度目の調査が行われると有志が勉強会を立ち上げ、1991年に佐原の町並みを考える会を結成。1軒1軒調査に入る過程で少しずつ住民の間にも町の成り立ちや歴史への興味も育まれていった。

「鍵は住民の合意形成でした。会では粘り強く話し続け、保存活動のアピールのため小野川を定期的に清掃しました」。市が町並みの再生を核とした観光ビジョンや景観条例を策定する中、短時間で92%の賛成を得て1996年に佐原の町並みは関東初の重要伝統的建造物群保存地区に選定された。「町並みが表舞台に出ると住民が佐原への誇りを取り戻し、観光を視野に商売の夢を持つことができました。以後、家屋を昔の形に修復することがステータスになり、保存活動に拍車がかかりました」。

観光用に小野川の舟運も復活。官民一体でまちづくりと観光振興が進められ、2009年には観光客数53万人を数えた。2011年の東日本大震災では、修復した家屋の瓦が崩れ落ちるなど大打撃を受けたが、果敢に復興に取り組み、2年半で現状を回復。「今では観光客数もピーク時に戻っています」。高齢化で増えた空き店舗や壊れた家屋の対策が課題だが、空き店舗での新たな出店や、民家を利用したホテルをオープンする動きも出ている。利根川の水運がもたらした繁栄の遺産が、今また町の発展を推進する力となって明日を築く糧となる。住民に息づく佐原への誇りも、大きな力になっていることだろう。



昔の貴重な蕎麦資料も残る1782年創業の蕎麦屋、小堀屋本店。建築は1900年



正上醤油店。天保期の1832年建築。東日本大震災で崩れたが、再び修復された\*



1995年から続く清掃事業。以前は川底に粗大ゴミが沈んでいる状態だったという\*



小野川水門。向こうは利根川で、利根川の増水時には、逆流防止の役割を果たす

協力・写真提供／NPO法人小野川と佐原の町並みを考える会（\*印）、千葉県立中央博物館大利根分館